

昭和戦中期の戦時託児所について — 幼稚園から戦時託児所への転換事例 — ②

矢 治 夕 起

(2014年10月14日受理)

要 約

1944 (昭和19年) の東京都によるいわゆる「幼稚園閉鎖令」により都内の多くの幼稚園が閉鎖に向かうが、杉並区の井草幼稚園も戦時託児所に転換して保育を続けた。江戸川区の江戸川双葉幼稚園では戦時託児所に転換後も対象児や保育曜日、保育時間など幼稚園時代と変わらない保育を行っていたが、井草幼稚園では託児所としての規定に従い、年中無休の長時間保育を行っていた。空襲が激しさを増したため、戦時託児所としての活動は3ヶ月余りと短期間であったが、困窮家庭の子どもも受け入れ、「託児所」としての保育に努めていた様子がうかがえた。

キーワード 鈴木積善、井草幼稚園、鈴木フミ、戦時託児所、保育日誌

1 はじめに

拙稿「昭和戦中期の戦時託児所について—幼稚園から戦時託児所への転換事例—①」^{注1)}において、1944 (昭和19) 年4月の東京都によるいわゆる「幼稚園閉鎖令」により、多くの幼稚園が閉鎖に向かう中、戦時託児所に転換して保育を続けた数少ない幼稚園の事例 (江戸川双葉幼稚園 (私立)) を紹介した。今回は、同じく「幼稚園閉鎖令」を受けて戦時託児所に転換した杉並区の私立幼稚園、井草幼稚園の事例を取り上げる。江戸川双葉幼稚園との共通点、相違点などを明らかにし、幼稚園から戦時託児所に転換した幼稚園の保育の実態にまた一つ迫りたい。

2 井草幼稚園の創立者、鈴木積善と井草幼稚園

学校法人松峯学園井草幼稚園は1933 (昭和8) 年、東京都杉並区井荻1丁目 (現・杉並区善福寺1丁目) に鈴木積善によって設立された。

鈴木積善は1896 (明治29) 年、福島県の浄土宗の古寺、松峯山如来寺 (現・いわき市) に生まれた。江戸末期から明治30年代にかけて寺子屋や夜学を開いていた父親の影響を受

け、長じては上京して宗教大学（現・大正大学）、築地本願寺の研究生として、社会事業や児童教化などの問題に取り組んだ¹⁾。積善が宗教大学に入学した頃、浄土宗本願寺派が大正天皇の御大典を記念して日曜学校令を出し（1915（大正4）年）、仏教大学（現・龍谷大学）の学生らが中心となり大規模な日曜学校運動が展開されたのを契機に、仏教各派の日曜学校運動が盛り上がりを見せていた²⁾。積善は宗教大学在学中から仏教日曜学校で児童教化運動に関わり³⁾、宗教大学卒業後も1918（大正7）年に開設された宗教大学の社会事業研究室で児童の宗教教育について研究を進めた⁴⁾。1921（大正10）年には「児童精神生活の特徴」「児童と宗教意識」「児童の観たる仏の研究」など児童研究を踏まえた仏教日曜学校の経営方法を示した『児童宗教々育の理論と実際』を出版する^{注2)}。

その後、積善は農繁期託児所の実践など様々な社会事業を試みた。それらの成果は1923（大正12）年に『寺院中心の社会事業』^{注3)}として出版され、郷里福島如来寺にも1928（昭和3）年、福島県初の農繁期託児所を開設する⁵⁾。

これらの積善の社会事業に関する実践・研究が認められ、1924（大正13）年には浄土宗報恩明照会の社会事業に参与して小石川学園の設立主幹に就任した。更に、1929（昭和4）年に小石川の伝通院が社会教化事業の拠点として設けた伝通会館の創立に携わり、主事として迎えられる⁶⁾。積善は伝通会館の主事として、仏教宗門の中で初めて合唱団（パドマ合唱団）を創設するなど仏教の会館事業に新しい足跡を残している⁷⁾。

積善は学生時代から児童教化運動に関わる中で、仏教思想に基づく児童教化と家庭浄化を自ら実践する場として幼稚園を創設したいとの強い思いがあった。幼稚園創設に向けて協力を勧募する「趣意書」には以下のような思いが綴られている⁸⁾。

子供の教育の問題は非常に広範にわたつてゐるが、就中、幼児の教育と宗教の教育との二は最も根本的の問題である。最近満6歳までの教育が各人一生涯の生活を支配するといふことが明らかになつて来た。即ち人生教育の基礎は幼児時代に既に決定さるゝのである。茲に家庭浄化の問題があるのであるが家庭教育のみで完全なるものとは言ふことが出来ない。此処に幼稚園の重要性がある。次に宗教教育は全人教育の基調をなすもので、この問題は今や議論の時代ではなく実行の時代となつた。然るに実際に於いては隔靴搔痒の嘆なきを得ない^{注4)}。

浄土宗関係者の中に積善の思いを応援してくれる人々が現れ、それらの人々の援助の下、1933（昭和8）年に井草幼稚園を創設する⁹⁾。しかし、開園後も伝通会館での講話会や勉強会などの活動を続け、更に福島の如来寺と往復する生活による過労から、井草幼稚園を開園した僅か1年半後の1934（昭和9）年11月17日、積善は39歳の若さで夭逝する¹⁰⁾。

積善亡き後は、積善の妻フミ子が園長を務めることになり、戦時中の託児所への転換、戦後の幼稚園としての再開と激動の時代を園長として園の経営に当たった。フミ子はその後、2002（平成14）年に97歳で亡くなるまで園長を務めた¹¹⁾。

3 戦時下の井草幼稚園の保育

開園当初の井草幼稚園は、積善とフミ子の子どもも含めて園児は4～5人程度で、積善とフミ子の他に2人の先生が保育にあたり、大人の数の方多くて「まるで子供は陰に隠れていて分からない位」¹²⁾だった。しかし、昭和10年代後半には年少1組(黄組)、年長2組(青組、紅組)の3組編成の2年保育で、年少・年長合わせて80人から100人近い園児が在籍するまでに発展した^{注5)}。

太平洋戦争開戦後、初の新年度を迎えた1942(昭和17)年4月5日の保育日誌には、「時局柄といふのか、最初から『まだ入れませうか』『もう一ぱいになりましたでせうか』などと云ってくる方ばかり。卒業式当日迄の申込者はわづか^(ママ)33名。それが入園式の今日は70人の多数にならうとは夢にも考へておなかつたことだ。通知を出すのも諸準備をするにも活気がある。」¹³⁾と開戦の影響もさほどなく、順調に園児が集まってきている様子がうかがえる。しかし、「空襲警報のあった場合にまごつかぬ為」¹⁴⁾に「登園時間を8—9時までと改め」るなど¹⁵⁾、米軍機による空襲への対応が早くも始まっている。

1943(昭和18)年度に入ると、園庭に掘られた、入口に滑り台がついた7間(約13m)の防空壕への退避訓練が学期ごとに行われるようになる¹⁶⁾。

戦争末期の1944(昭和19)年度に入ると、保育の現場も戦時色が更に濃くなっていく。「保育記録・山組・昭和18年11月～」には1944年度の入園式の前日(4月4日)に以下のような記載がある。

高岡先生 6年間勤続 熊本に疎開された

(中略)

組の名前を変更したこと、創立以来18年続いた組名を時局に^(ママ)応はしく変更

山の組(今までの紅組)

空の組(// 黄組)

海の組(// 青組)

(中略)

園庭の遊具は鉄製品応召で子供の遊具は全部取こはされた。淋しいと云ふより、いよいよ迫った重大事局の波、今後総員が工夫して保育にあたらねばならない。難局を乗切る一大決心で明日の入園式を待つ。

1941(昭和16)年に国家総動員法に基づいて公布された金属類回収令は、1943(昭和18)年の改正で更に強化され、東京

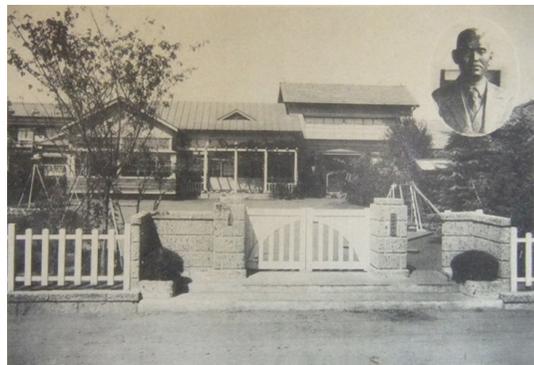


図1 園庭に遊具があった頃の井草幼稚園
(井草幼稚園所蔵の昭和18年3月の卒園記念写真帳より)

都でも1943年9月から学校などの教育機関の暖房器具から二宮尊徳像まで回収対象として供出させている。井草幼稚園もこの金属供出によって園庭の金属製の遊具が全て撤去されてしまう。

1944年度の井草幼稚園は、新入園児、旧園児と合わせて園児数100人超で始まっている。4月7日のその日の活動欄には「チューリップ」と並んで「僕は軍人」という記載がある。「僕は軍人」とは、当時よく歌われていた唱歌「僕は軍人大好きよ」のことと思われる。また、海軍記念日（5月27日）には「水兵さんの歌」（童謡「かもめの水兵さん」と推測される。）を歌い、日露戦争以降日本海軍が戦時に使用していたZ旗のことと推測される「ゼット号旗^{ママ}」を作るというような時節柄を反映した活動もしているが、日々の活動欄からは「時計」「お池のピョン太郎」などのお遊戯、「浦島太郎」などの紙芝居、体操、自由画といった通常の保育活動が行われていた様子がうかがえる。

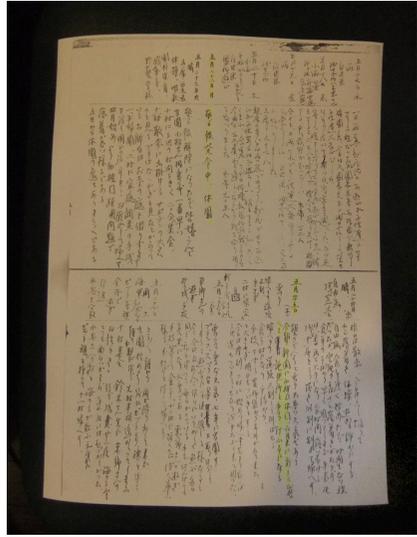


図2 「保育記録・山組昭和18年11月～」（井草幼稚園所蔵、写真は現物を複写したもの）

4 都立井草戦時託児所への転換とその後の保育

東京都が都下の公私立幼稚園長を泰明国民学校に集め、いわゆる「幼稚園閉鎖令」と称される通牒を出した4月19日の井草幼稚園の保育日誌（「保育記録・山組・昭和18年11月～」）には、下記のような記載があるだけで、「幼稚園閉鎖令」に関しては全く言及されていない。

4月19日（水） 雨 相撲、紙芝居

かなりひどい雨降りなので出席数は60名たらずであった。大きな積木をいためた子供があり松元先生よりご注意があった。各組に分れて遊戯をし、その後相撲をした。田村先生にトンクマの紙芝居をして頂き、10時半におかへりにした。

「幼稚園閉鎖令」に関する記事が新聞に掲載された4月20日以降も、保育日誌ではこの話題に触れていない。4月19日に泰明国民学校に集められたのは都下の認可幼稚園の園長のみで、そのため当初は無認可園は閉鎖の対象外と解されていたので、この時点ではまだ無認可園であった井草幼稚園は対象外という判断で、「幼稚園閉鎖令」に言及していないのではないかと推測される。その後、5月に入っても幼稚園閉鎖の問題に触れる記述はない。しかし、東京都が民生局長・教育局長名で「公私立幼稚園非常措置ニ対スル善後処置並ニ保育施設ノ整備ニ関スル件依命通牒」を出し、無認可幼稚園その他各種保育施設に対しても保育事業の休止を求めた5月24日の前日、5月23日の保育日誌には「4月始めより幼稚園疎開問

題で落ち着かない様子である。5月からは休園の処もありまちまちである。」と初めて閉園問題について言及されている。

都が24日に幼稚園閉鎖の通牒を出したことを、鈴木フミ子園長は翌日の新聞で知ったようである。5月25日の保育日誌に「今朝の新聞に幼稚園休園、6月末に新しく切替へて託児所と変り、行ふ事になる。」とのみ、簡単に記されている。しかし、幼稚園閉鎖の期日である5月31日には下記のように記されている。

5月31日(水) 出席百人位

東京都の公私立幼稚園は今日で全部休園になるわけだが、いろいろのことで、ここだけはもう少しやることにする。家庭からは何を云ってくる人も特にない。……(中略)……幼稚園問題もいよいよ多事多難なことだ。

多くの園が5月31日をもって閉園した中、井草幼稚園は6月1、2日もいつものように保育を続け、6月3日に「母の会」を開き、保護者に今後の説明を行っている。

6月3日(土) 母の会 園児は八幡様へ 鵜飼先生と奥様御来園

お母様の出席百人近い 11時閉会 簡素ないい会であった

昨日綺麗にお掃除して下さったので今朝は子供等が「今日はお式だからおべんじょがきれいだよ」と云ふ。9時半頃まで室内でも遊ばしたが、母の会が10時からなので八幡様に出かけて頂く。私はお母様に手伝って会場を作る。国民儀礼の為、簡単な挨拶をしてから鵜飼先生に現下の情勢と託児所、今後の登園の方針についてくはしくお話して頂く。7月から託児所に転向するため杉並区は5月31日限り休止しているので、当園も休止しなければならないが、子供のため来週いっぱい幼稚園をすること、月謝はいただくかぬこと、など話す。半分でも取って頂きたい、母の会費として取って頂きたいなど話が出たが頂かぬことにした。11時10分閉会。八幡様から帰った子供達とお母様と門で一緒に帰り共に帰る。

閉園命令後も井草幼稚園は「子どものために」と6月第2週まで保育を続けた。6月8日の保育日誌には、「もうすぐお休みになるのがつまらなそうに?『私幼稚園が大好きよ』^(ママ)なんてトク子ちゃんが口走り! 他の子供達も同じ気持ちらしいでした。」と閉園を淋しがる子どもたちの様子も綴られている。

井草幼稚園は6月10日に閉園式を開き、幼稚園として最後の日を迎えた。6月10日の保育記録の後には、園長鈴木フミ子の思いが書かれている。

過去12年の歴史をもつこの幼稚園は、戦時非常措置により、当分休止することになる。恐らくは今後今迄のやうな幼稚園は再現しないと思ふ。5月31日を持って東京には幼稚園がなくなったのだから……

6月10日以降、保育日誌には戦時託児所へ転換するまでの経緯や託児所に転換後の様子などが6ページにわたって綴られている。それによると、閉園後、保母は休職となったが、鈴木園長は戦時託児所としての申請のために区の職員との面談をしたり、他の戦時託児所に見学や手伝いに行くなど、戦時託児所開所に向けて精力的に動いている。当初は7月には戦時託児所として再開する予定だったようだが、7月半ばを過ぎても区から施設調査等に関して何の連絡もなく^{注6)}、8月8日になってようやく戦時託児所としての許可が下りる。鈴木フミ子は戦時託児所では保育主任に就き、所長は他の託児所の所長が兼任する形を採ることになり、8月23日にはフミ子と幼稚園時代の保母の履歴書を区役所に提出している。翌8月24日には区から、9月1日から戦時託児所として保育を始めるようにとの電話があり、保母も全員出勤して書類作成等その準備に当たっている。

8月29日に幼稚園時代の子どもたちに招集をかけたところ、疎開した子もおらず、84人の子どもが登園した。保護者からもいつ園が再開されるのかとの問い合わせが多かったようだが、子どもたちも園の再開を心待ちにしていたようである。

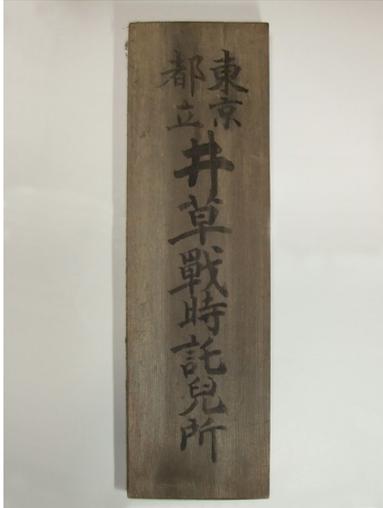


図3 戦時託児所時代の看板
(井草幼稚園所蔵)

しかし、戦時託児所は幼稚園と異なり、母親が就労していることが受託条件になるので、幼稚園時代の子どもの中には受け入れを断らねばならない事例もあったようである。9月4日10時から入所式を行い、正式に都立井草戦時託児所になって以降は、東京都の「戦時託児所設置基準」に従い日曜日も保育を行い、7時半から夕方までと保育時間も延長している¹⁷⁾。幼稚園時代は100人を超える園児を受け入れていたが、井草戦時託児所では定員を65人と定めている^{注7)}。その中には保育料免除、1/3、1/2といった困窮家庭の子らも6人含まれていた。

幼稚園時代は毎日書かれていた保育日誌（「保育記録・山組・昭和18年11月～」）は、戦時託児所に転換した9月以降は、9月1～4日、9～11日、30日は記述があるが、それ以外の日は記載がない。10月に入ってからは、2～3日、7～9日、12日のみ記載があり、10月13日以降、井草戦時託児所としての活動をも休止した12月¹⁸⁾までの2ヶ月程の間は記録が全く書かれていない。

10月に入ると保育日誌に書かれているのは、「石鹼配給あり 15ヶ」（10月2日）、「第1回野菜配給あり 臨時配給にておさつ1俵」（10月7日）、「大根3本」（10月8日）、「百人と申告せしに、45人分の配給にして1日おきのおやつなり。」（10月12日）とほとんど配給に関することしか書かれていない。戦局の悪化で、本来戦時託児所に配給されるはずの物資も滞りがちになっていることがうかがわれる。そして、終戦前の保育日誌の最後の1行も「味噌、醤油の配給に関する通知あり。」で終わっている。10月以降の記録が残っていないのは、物資の不足や度重なる空襲警報の発令などで時間的にも物的にもぎりぎりの状態だったため

と推測される。

1924（大正13）年、戦時中に零戦の2/3を生産したとされる中島飛行機製作所が群馬県太田町（現・太田市）から杉並区内に移転し、1925（大正14）年に完成した、杉並区内では唯一の大工場であった東京工場が杉並区内では稼働していた¹⁹⁾。そのこともあり、主に中島飛行機を対象としたと思われる空襲が頻発し、杉並区内では1944（昭和19）年11月以降、終戦までの間に18回、空襲で被災している²⁰⁾。1944年11月24日の第1回空襲では、死者こそ出なかったものの、一部で火災、杉並区内の多くの地域が損壊などで罹災した。12月3日の第2回空襲では杉並区内の広範な地域が焼失している。空襲で多くの地域が被災する中、杉並区内では保育を続行することは困難という判断から、指令により井草戦時託児所は1944年12月に戦時託児所としても閉鎖になる²¹⁾。

5 まとめ

東京都による「幼稚園閉鎖令」は当初、認可園のみが対象と解されていたこともあり、前回取り上げた江戸川双葉幼稚園と今回の井草幼稚園では、「幼稚園閉鎖令」が出された時点で認可園であった江戸川双葉幼稚園では、閉鎖問題に直後から保育日誌などで多数言及しているが、無認可園であった井草幼稚園では閉鎖問題に言及するようになるのは「閉鎖令」から1ヶ月以上経過してからである。このように「閉鎖令」に対する反応には相違がみられるが、都側の事務手続きの滞りで、両園共に戦時託児所への転換を申請してから認可の通知が出るまで2ヶ月以上要している。

江戸川双葉幼稚園は戦時託児所に転換後も戦時託児所の「基準」には従わず、幼稚園時代と保育時間も保育曜日もほぼ同じまま保育を続けていたが、今回取り上げた井草幼稚園では、戦時託児所としての活動期間は3ヶ月あまりと短期間ではあるが、戦時託児所の「基準」に忠実に、困窮家庭の子どもも受け入れ、早朝から夕方まで長時間の保育を行い、日曜日も保育を行っていたことがうかがわれる。1931（昭和6）年生まれ、松峯学園理事長の鈴木和長氏（鈴木積善の子息）は、戦時託児所に転換した後も「空き地に畑が作られたりはしたが、保育の内容については、幼稚園時代とほとんど変わったところはない。」と話されていたが²²⁾、保育時間や保育を行う曜日には変化があったことがわかる。この相違は江戸川区、杉並区とそれぞれの所在地の違いもあるが、江戸川双葉幼稚園の園長菅原衛行と井草幼稚園の園長鈴木フミ子の保育に対する考え方の相違に拠るところが大きいと考える。

東京都内で戦時中、幼稚園から戦時託児所に転換して保育を継続した園は他にも何園か把握している。江戸川双葉幼稚園も井草幼稚園も戦後、幼稚園として再開している点で共通しているが、他のいくつかの園は、戦後、幼稚園ではなく保育所になる道を選択したことが分かっている。今後は、更に幼稚園から戦時託児所への転換事例を調査していく中で、幼稚園に戻らず保育所になる道を選んだ、その選択の相違の背景なども明らかにしていきたい。

注

- 1) 淑徳短期大学研究紀要第53号、2014、p.85-96.
- 2) 鈴木積善『児童宗教々育の理論と実際』宗教大学社会研事業研究室、1921。大正10年に出版された積善の『児童宗教々育の理論と実際』は、明治期の仏教日曜学校の教本と比べ、「日曜学校の組織の仕方や教授テクニックなどが論じられ、また教師心得などの項目もあるなど、教科書としての精緻さが如実に上昇している。加えて同書では、児童心理学の知見を紹介しつつ、児童に特化した宗教教育のあり方が力説されていることも、特筆に値しよう。」と大正期の仏教日曜学校に関する論文の中でも高く評価されている。(碧海寿広 前掲論文2) p.68.)
- 3) 鈴木積善『寺院中心の社会事業』浄土宗務所社会課、1923。『寺院中心の社会事業』は寺院の社会的機能や寺院を中心とした社会的事業の必要性を説き、「救貧並びに防貧事業」「児童保護事業」「社会教化事業」に関し、欧米の事例を紹介しながら寺院が行う社会事業の施設・設備や方法を具体的に示している。
- 4) 資料中のひらがなはそのまま表記したが、旧漢字は現在の字体に改め、漢数字は算用数字で表記した。以下、後出の「保育日誌」などの資料も同様。
- 5) 戦火を免れ、創設当時の木造の園舎の一部が今も残る井草幼稚園には、園長であった鈴木フミ子や保母らが筆記した大学ノートに記載された「保育日誌」（一部は「保育記録」というタイトル）や卒園アルバムなどが多数残されている。在籍園児数は「保育日誌」の記載による。「保育日誌」に関しては、鈴木フミ子が大部分を筆記したと思われる「保育記録」「山組」「鈴木先生、安藤真砂子」と表紙に書かれた、1943（昭和18）年11月から1946（昭和21）年4月までの年長組の「保育日誌」から主に引用した。以下、本稿ではこの「保育日誌」を「保育記録・山組・昭和18年11月～」と呼称する。
- 6) 同前「保育記録・山組・昭和18年11月～」には「小笠原島民の引揚げ、政変^(ママ)に供ふ都長のvariety等々、突然の事項のため事務がおくれているとの理由なり。」と事務手続きが遅れている理由が記されている。
- 7) 鈴木フミ子 前掲対談8) 及び井草幼稚園 前掲資料1) に1944（昭和19）年に戦時託児所に転換後、園のホールが近所の桃井第4小学校（資料にはともに「小学校」と記載されているが、1944年当時は「国民学校」が正しい。）の分教場として使用されたことが記されており、保育室の広さの問題からも定員を少なくしたものと推測される。

引用・参考文献

- 1) 井草幼稚園「学校法人松峯学園井草幼稚園入園案内」中の「回顧」より。学校法人名の「松峯学園」は、いわき市の如来寺の山号「松峯山」に由来する。
- 2) 碧海寿広「第6章 青年文化として仏教日曜学校一大正期の東京における一事例から一」（研究代表者岩田文昭『近代化の中の伝統宗教と精神運動—基準点としての近角常観研究』（平成20年度～平成23年度科学研究費補助金研究成果報告書）、2012、p.68.
- 3) 高橋良和「近世交名録（11）鈴木積善氏」（法然上人鑽迎会『浄土』第31巻第2号、法然上人鑽迎会、1965、p.18.）
- 4) 矢吹慶輝「はしがき」（鈴木積善 前掲書注2）序p.1.）、久保良英「序」（鈴木積善 同前序p.3.）
- 5) 井草幼稚園「井草幼稚園史」（井草幼稚園『井草幼稚園創立60周年記念誌』1993）
- 6) 高橋良和 前掲資料2) p.19.、井草幼稚園 前掲資料1)
- 7) 高橋良和 同前。

- 8) 鈴木フミ子 (対談)「往時をしのんで」(井草幼稚園 前掲資料5)『井草幼稚園創立60周年記念誌』。この対談には「鈴木が幼稚園を建てるなら応援しようと言って、増上寺の御前様の椎尾辯匠先生、伝通院の木村玄俊先生をはじめ、全国に散らばっている先生方やお友達が応援して下さいなんです。貧しい私たちの経済では、とても建てられませんものね。園舎や机、椅子……全部で4,500円くらいだったでしょうか……。伝通会館からはピアノを寄付して頂き、阿弥陀様も伝通院からお移し下さったんです。」との記述がある。また、井草幼稚園前掲資料1)にも「幼稚園建築費は同時4千7百円、設立総予算6千円。一浄土門徒の教育への真摯な志に対し、総本山知恩院(京都)、浄土宗宗務所より5百円もの御寄附をはじめ、多方面の方々から総額5千円にのぼる篤志が寄せられた」と宗門関係者からの多大な後押しがあったことが記されている。なお、井草幼稚園は1933(昭和8)年に創設されて以降、1944(昭和19)年に戦時託児所としても休止するまで継続的に保育を行っているが、認可園となったのは戦後の1949(昭和24)年4月である(東京都杉並区役所編『杉並区史』東京都杉並区、1955、p1124.)。
- 9) 同前。「井草幼稚園史」(前掲資料8)井草幼稚園『井草幼稚園創立60周年記念誌』)
- 10) 鈴木フミ子 前掲対談8) 鈴木積善の没年月日は、積善の孫にあたる井草幼稚園副園長鈴木啓順氏のご教示による。
- 11) 同前。
- 12) 同前、井草幼稚園 前掲資料1)、高橋良和 前掲資料2) p.18-19.
- 13) 井草幼稚園所蔵「保育日誌 昭和17年度 鈴木・高岡・渡邊」
- 14) 同前。13)の「保育日誌」に挟み込まれていた「新入園児のご父兄様へ」という手紙の中の「保育時間」に関する項目に、登園時間の変更について「◎空襲警報のあった場合にまごつかぬ為」「◎早い方と遅い方の差を少なくする為」と理由が書かれている。
- 15) 井草幼稚園所蔵 前掲資料13)
- 16) 鈴木フミ子 前掲対談8)。井草幼稚園所蔵 前掲資料注5)「保育記録・山組・昭和18年11月～」に11月25日と2月28日に「^(マ)待避訓練」を行ったことが記載されている。
- 17) 井草幼稚園 前掲資料注5)「保育記録・山組・昭和18年11月～」の9月10日に「開所以来最初の日曜日。誰も来ないと思ったら7時半にはお弁当まで持って来た子があって、9時半までには出席10名。」という記述が、また10月12日に「子供はおやつなしとも3時から4時までよく遊ぶ。時局とは云へ辛抱強くなったことに驚く。」と長時間保育になっていることを示す記述がある。
- 18) 井草幼稚園 前掲資料1)及び井草幼稚園『創立70周年記念誌—保育日誌—昭和18～21年抜粋』。ともに1944年12月に閉鎖になったことが記されているが、正確な日付は不明。
- 19) 東京都杉並区役所編集・発行『杉並区史(下巻)』1972、p.652-656.
- 20) 東京都杉並区役所編集・発行『杉並区史』1955、p.1571-1581.
- 21) 井草幼稚園 前掲資料18)の『創立70周年記念誌—保育日誌—昭和18～21年抜粋』には「都立戦時託児所もこの年昭和19年、指令により閉鎖。」と書かれているが、どこからの指令なのかは書かれていない。
- 22) 2014(平成26)年9月11日、鈴木和長氏より聞き取り。